

「母の日の集い」で紹介させて頂いた詩です。作者不詳で、もともとは英語で書かれていたものですが、日本語に翻訳されたものがインターネット上に掲載され、広がっていったようです。

私にも20歳と18歳の娘がいます。この詩を初めて読んだとき、娘たちを最後に抱っこしてやったのはいつだろう、最後に一緒にお風呂に入ったのはいつだろう、最後に一緒に寝たのはいつだろう、という思い出してみました。あれが最後だったという記憶は、はっきりとは思い出せませんでした。

どんなに子どものことを大切に思っても、仕事が忙しかったり、精神的に余裕がなかったりすると、早く何でも一人で出来るようになってくれないかな、いつになったら親離れするんだろう、トイレぐらい1人で行ってくれないかな、休みの日ぐらいゆっくりさせてほしい・・・などというらだってしまうこともあるでしょう。でも、ある時ふと気が付くと「いつのまにか」に変わっているものなのです。この詩のように、いつか「最後のとき」がくることは、頭ではわかっているつもりだけど、「これが最後」というのはその時には分からないのです。

子どもの「今」は、2度と繰り返しません。子どもの「今」としっかり向き合って、「今の」子どもと関わる時間を大切にしてくださいね。

## 『最後のとき』

作者不詳

赤ちゃんをその腕に抱いた瞬間から あなたはこれまでとは全く違う人生を生きる  
以前の自分に戻りたいと思うかもしれない  
自由と時間があって 心配することなど何もなかったあの頃の自分に  
今まで経験したことがないほどの徒労感 毎日毎日まったく同じ日々  
ミルクを与えて背中をさすってやり おむつを替えては泣かれて  
ぐずられて嫌がられて 昼寝をしすぎてもしなくても心配で  
終わることのない永遠の繰り返しに思えるかもしれない  
だけど忘れないで……

すべてのことには、「最後のとき」があるということ

ご飯を食べさせてやるのはこれが最後、というときがやってくる

長い一日のあと子どもがあなを膝で掻き回す  
だけど眠っている子どもを抱くのはこれが最後

子どもを抱っこ紐で抱えて出かける  
だけど抱っこ紐を使うのはこれが最後

夜はお風呂で髪を洗ってやる  
だけど明日からはもう一人でできると言われる

道を渡るときには手を握ってくる  
だけど手をつなぐのはこれが最後

夜中こっそり寝室にやってきてベッドにもぐりこんでくる  
だけどそんなふうに戻されるのはこれが最後

昼下がりに歌いながら手遊びをする  
だけどその歌を歌ってやるのはこれが最後

学校まで送っていけば行ってきますのキスをしてくる  
だけど次の日からは一人でだいじょうぶと言われる

寝る前に本を読み聞かせて 汚れた顔をふいてやるのもこれが最後

子どもが両手を広げて あなたの胸に飛び込んでくるのもこれが最後

だけど「これが最後」ということはあなたには分からない  
それがもう二度と起こらないのだと気付くころには  
すでに時は満ちてしまっている

だから今、あなたの人生のこの瞬間にも  
お父さんの「最後」があることを忘れないで  
もう二度とないのだと気付いてはじめて  
あと一日でもいいから、あと一度きりでいいから、と切望するような  
大切な「最後のとき」があることを